

# Romeo and Juliet: “Consummation” の美※

金城 盛 紀

## 1

Laurence Lerner は、その近著 *Love and Marriage* において、愛と結婚は本来的に矛盾対立するものであると述べている。<sup>1</sup> これは、Deni de Rougemont が、*L'Amour et L'Occident* において論じて有名になった命題、すなわち、「西欧における情熱と結婚の必然的な相剋」<sup>2</sup> を踏襲したものであると思われる。Lerner は、西洋の興味深い視座に立って *Romeo and Juliet* を捉え、Shakespeare のこの恋愛悲劇も、愛と結婚が両立し得ないものであることを示すと考えている訳である。

しかしながら、*Romeo and Juliet* が表している対立は、愛と結婚というよりは、愛と人生そのものではないかと思われる。若い二人の男女が、あつと言う間に燃焼させる純粹にして激烈なる愛は、現実の人生においては、純粹激烈なままで持続させることは不可能である。これを悲劇的現実と見るならば、この現実が、人生の条件である。Norman Rabkin の言葉を借りれば、“existential antinomies”——実存の二律背反である。<sup>3</sup> Shakespeare の妙技は、このような極致に達した愛の存続を人生そのもので否定することによって、瞬時に燃え焔めき消滅する愛を、光彩陸離たるものとして不滅の美しさに定着させたところに見られる。Shakespeare は、“love-devouring death”——恋をむさぼり食う死<sup>4</sup>——の犠牲となる愛を、二人の死後、宿敵両家の和解のしるしとして建立されるという黄金の像よりも、燦然と輝く“death-devouring love”——死に打ち勝つ愛——として万人の心を打つ美しいものにしている。否定による肯定讃美の見事なパラドックスである。

## 2

*Romeo and Juliet* が両極構造を基本的枠組として、プロット、イメジャリー、登場人物、さらに文体にいたるまで、二つの相反する要素によって組立てられていることは、Harry Levin が鮮やかに分析している通りである。<sup>5</sup>

Montague 家と Capulet 家は、互いに相手を宿敵としてヴェローナを二分する名門であるが、Montague 家の御曹司 Romeo と Capulet 家の愛嬢 Juliet の運命的恋愛そのものが、愛と憎悪の対立を生々しく集約している。“My only love sprung from my only hate.” (I. v. 136)——恋の相手が宿敵にほかならない状況の強烈なジレンマである。しかも、“ancient grudge” (Prologue, 3)、古い遺恨宿怨が、若い二人の情熱と両家の和解を願う修道僧 Law-

---

※ 本稿は第20回シェイクスピア学会（1981年10月17日、於岡山大学）における口頭発表に基づく。

rence の善意によって遂に終止符が打たれんとする寸前に、いくつかの偶発的事件、偶然の悲運によってプロットは進展し、愛は死に終る。「薄幸の星運のもとに生まれた恋人たち」——“a pair of star-cross'd lovers” と Prologue (6) において語られるように、運命は二人の愛を否定するのである。しかし、その恋は運命と対立し、「死の影に覆われた恋」(9)であるが故に、激しく燃え上り、抒情性は最大に高揚するのである。

相対立する二つの要素があって、その一つが他を強調する構造は、繰り返されるドラマティック・アイロニーとも関係がある。Juliet との出会いの場となる Capulet 家の舞踏会へ Romeo が重い足を運んだのは、冷たい恋人 Rosaline を一目でも見てその美しさを讃えるため——“to rejoice in splendour of mine own” (I. ii. 103) であった。その絢爛たる舞踏会において、Juliet を垣間見て、

O, she doth teach the torches to burn bright.

It seems she hangs upon the cheek of night

As a rich jewel in an Ethiop's ear——

Beauty too rich for use, for earth too dear.

So shows a snowy dove trooping with crows

As yonder lady o'er her fellows shows.

(I.v. 43-48)

と思わず漏らす感嘆讃美の声は、Tybalt の敵意を新たに燃え上らす。さらに、この血の気の多い若者の敵愾心は、Capulet によってなだめられ封じ込められることによって、いっそう煽られ、Romeo の「闘入」を“bitter gall”——苦い胆汁(91)に変えてやると決心させる。Lawrence の庵で結婚の儀式をすませた Romeo が、今や親戚となったその Tybalt に対して示す低姿勢が、Mercutio と Tybalt の死をもたらし、Romeo を追放の身、“fortune's fool” (Ⅲ.i. 138) とする結果となる。Romeo は追放、父親には Paris との結婚を強要されて、進退きわまった Juliet ではあるが、Lawrence に解決策を示されて、再び従順素直な娘となって頑固な父親を安堵させる。しかし、この善意から生れた打開策、従順さが裏目に出る。Paris との挙式が性急に繰り上げられ、Lawrence の計算に大きな狂いが生じる。この予想外のハプニングは、他の偶発的事故と重なって致命的なものになる。マンチュアに追放の身となった Romeo は、Juliet と再会する夢を見るが、その夢から覚める間もなくもたらされるのは、彼女の死の報という「現実」である。毒薬を手に入れて Juliet の眠る墓に急行した Romeo を待っているのは、Lawrence の薬によってもたらされた仮死状態から今や目覚める直前の Juliet である。顔に生気が戻る彼女の美しさは、死してなお輝きを失わないと繰り返して語られる。

For here lies Juliet, and her beauty makes

This vault a feasting presence, full of light.

Death, lie thou there, by a dead man interr'd.

How oft when men are at the point of death

Have they been merry! Which their keepers call  
A lightning before death. O how may I  
Call this a lightning? O my love, my wife,  
Death that hath suck'd the honey of thy breath  
Hath had no power yet upon thy beauty.  
Thou art not conquer'd. Beauty's ensign yet  
Is crimson in thy lips and in thy cheeks,  
And Death's pale flag is not advanced there.

(V.iii. 85-96)

痛惜の念耐え難いアイロニーである。ドラマティック・アイロニーも、こう幾度も繰り返されると、「運命のアイロニー」の仮借なき愚弄かとも思われる。従来論じられてきた運命悲劇としての *Romeo and Juliet* 観も思い出される。<sup>6</sup> しかし、この作品において、死が愛を激しくし、不滅化するものであることはすでに述べた通りであって、ドラマティック・アイロニー、「運命のアイロニー」は、このパラドックスを表現する劇的手段となっている。

登場人物や文体によって表される両極構造が、相反する二要素を共時的に強調するに対して、ドラマティック・アイロニーは、通時的に、同様の効果を生み出すと言えるであろう。先に起こる出来事が後続の出来事を強調する通時的なドラマティック・アイロニーの方が、逆転によっていっそう鮮烈な効果を与える。

*Romeo and Juliet* におけるこのようなアイロニーは、Shakespeare が施した時間のあつかいによってさらに強調される。周知の通り、*Romeo and Juliet* の原話は、Arthur Brooke の *The Tragicall Historye of Romeus and Juliet* (1562) であるが、Brooke の “honest restraynt of wyld affections” を論ずる韻文詩において9ヶ月に及ぶ物語りの期間を、Shakespeare はわずか4、5日に短縮している。<sup>7</sup> 二人の出会いから死まで一週間もない。時間を尺度として二人の仲を見れば、それはまさに泡沫の恋であり、はかなき愛である。夫となったばかりの Romeo が追放処分を受けたことを露知らぬ Juliet は、“Gallop apace, you fiery-footed steeds,/Towards Phoebus' lodging.” (III.ii. 1-2) と初夜の到来を待ち焦れる。しかし、その Juliet は、時を経ずして、太陽を引く駿馬の速さを歎かねばならない。

Wilt thou be gone? It is not yet near day.  
It was the nightingale and not the lark  
That pierc'd the fearful hollow of thine ear.  
Nightly she sings on yond pomegranate tree.  
Believe me, love, it was the nightingale.

(III.v. 1-5)

二人の結合は、時間に依存せざるを得ないが、その時間は、二人の別離を強制するのである——“Then, window, let day in and life out.”(51) 時は「運命のアイロニー」の執行者である。逆転のアイロニーは、夫婦となった相愛の二人を死へと疾走させる。ヴェローナの世界

は——その空間のみならず、時間も（ということは、Romeo と Juliet の人生そのものが）、三人の愛と敵対するのである。しかし、Shakespeare が、Brooke の物語りの時間を極端に押し縮め、時の暴虐を抗し難いものとしたのは、二人の情熱を濃縮し激しいものにし、また、その純度を高め、その抒情性を高揚して、絶体化するためにほかならない。<sup>8</sup> 愛の命が泡沫のごとく短いからといって、決して空しい訳ではない。時は強奪することによって、絶体化し、永遠性を与えるのである。

### 3

Come, civil night,  
Thou sober-suited matron, all in black,  
And learn me how to lose a winning match  
Play'd for a pair of stainless maidenhoods.

(III.ii. 10-13)

と、Juliet は夜に対して、「勝って、しかも負ける術を教えておくれ」と願うのであるが、「負けて勝つ」逆転勝利を博するのが Romeo と Juliet の愛のパラドックスである。

M. M. Mahood によれば、*Romeo and Juliet* には、控え目に数えても 175 の地口があるとのことである。<sup>9</sup> この作品では、多くの言語遊戯が対立相剋とかかわるものである。頻繁に出る矛盾語法も、相反する二要素の同時存在を表し、その上に、しばしば、「負けて勝つ」逆説そのものとなる。*Romeo and Juliet* においては、多くの地口もオクシモロンも単なる修辭的装飾ではなく、<sup>セマティック</sup> 主題的なのである。

Shakespeare のどの悲劇よりも *Romeo and Juliet* には地口が多いと述べているアメリカの研究者 Bowling は、この作品の地口を二つに大別する。「雑多なトピックに関して多様な意識を示す」もの、そして、「善悪の共存という中心主題」と直接的にかかわる地口の二種類である。<sup>10</sup> Bowling は、Capulet 家の召使 Sampson と Gregory が冒頭で騒々しく吐き散らす駄洒落は、前者に分類している。しかし、下男たちの卑猥な言葉遊びにも、*Romeo and Juliet* の両極構造が暗示されている。

Samp. 'Tis all one. I will show myself a tyrant: when I  
have fought with the men I will be civil with the  
maids, I will cut off their heads.

Greg. The heads of the maids?

Samp. Ay, the heads of the maids, or their maidenheads;  
take it in what sense thou wilt.

(I.i. 20-25)

“cut off their heads”に憎しみ、殺戮と性的関係を意味させる。しかもそのような行為を行うことが、“civil” (humane, gentle) になるものであると言う。愛情の表現というよりは、卑猥な所業であろうが、そして、それは Romeo と Juliet の霊肉一致の燃焼と対比されるも

のではあるが、憎悪、殺し合いとも対置される行為であることも事実である。続いて使われる語 “tool” (30) や “weapon” (32) に含まれる double entendre も同様に対照的な二重の意味であるといえよう。次にあげる Romeo と Mercutio の複雑に凝った地口による応酬も、相反する二要素が軸となっている。

Romeo. Give me a torch, I am not for this ambling.

Being but heavy I will bear the light.

Mer. Nay, gentle Romeo, we must have you dance.

Romeo. Not I, believe me. You have dancing shoes

With nimble soles, I have a soul of lead

So stakes me to the ground I cannot move.

Mer. You are a lover, borrow Cupid's wings

And soar with them above a common bound.

Romeo. I am too sore enpierced with his shaft

To soar with his light feathers, and so bound

I cannot bound a pitch above dull woe.

Under love's heavy burden do I sink.

(I.iv. 11-22)

*Romeo and Juliet* の矛盾語法は、しばしば例として挙げられる程有名になっている。Joseph Chang という人は、「矛盾語法とパラドックスの使用によって求められる効果は…愛、あるいは人生そのものの妥協なき対立を示すところにある」と指摘して、*Romeo and Juliet* に見られる愛や人生における対立を分析している。<sup>11</sup> 私が問題にしているのは愛や人生における対立というよりは、愛と人生との対立である。

Romeo の Rosaline に対する片思いの感傷は、Mahood が “odi-et-amor duality of passion” と言う愛憎併存の表現として語られている。<sup>12</sup>

Here's much to do with hate, but more with love.

Why then, O brawling love, O loving hate,

O anything of nothing first create!

O heavy lightness, serious vanity,

Disshapen chaos of well-seeming forms!

Feather of lead, bright smoke, cold fire, sick health,

Still-waking sleep that is not what it is!

This love feel I that feel no love in this.

(I.i. 173-80)

この相反する二要素の共存は、さらに、“A madness most discreet,/A choking gall, and a preserving sweet.” (191-92)と続き、“... and in that sparing makes huge waste.” (216)とパラドックスに発展し、“She has forsworn to love, and in that vow/Do I live dead,

that live to tell it now.” (221-22) と結ばれている。“Do I live dead”——生ける屍も同然——は、しかし、この飾辭が単なる矛盾撞着を表すだけでなく、これまで見てきた逆転のパターンに重なるものである。Romeo にとって、Juliet と共に実際に死ぬことは生きることを意味するにほかならないからである。

Lawrence の庵で式を挙げ、夜と夫の来るのを待っている Juliet は、当の夫が従兄の Tybalt を刺殺したという信じ難い知らせを受ける。その時の Juliet も、矛盾語法を連発して、Romeo の矛盾を並べ立てる。

O serpent heart, hid with a flowering face.  
Did ever dragon keep so fair a cave?  
Beautiful tyrant, fiend angelical,  
Dove-feather'd raven, wolvis-ravens lamb!  
Despised substance of divinest show!  
Just opposite to what thou justly seem'st!  
A damned saint, an honourable villain!  
O nature what hadst thou to do in hell  
When thou didst bower the spirit of a fiend  
In mortal paradise of such sweet flesh?  
Was ever book containing such vile matter  
So fairly bound? O, that deceit should dwell  
In such a gorgeous palace.

(III.ii. 73-85)

これも作品の両極構造の言葉による表現にもなっているといえよう。この矛盾対立も、最終的には、Juliet のもう一つの矛盾語法を借りれば、“sweet division” (Ⅲ.v.29) に連関するものである。早朝のひばりのさえずりは、後朝の別れの時の到来を知らせるもので、世間でいわれるような美しい声には聞えないが、二人の心をいっそう固く結び高揚させるものである。別れが思いをつのらすのである。死そのものが、回生の妙薬によってもたらされる——つまり死は生を意味するパラドックスにつながる両極分裂の構造である。

I will kiss thy lips.  
Haply some poison yet doth hang on them  
To make me die with a restorative.

(V.iii. 164-66)

#### 4

*Romeo and Juliet* におけるイメージラリーについては、Caroline Spurgeon 以来、明暗の対照がその中心をなすものとして論じられてきた。<sup>13</sup> 光と闇、昼と夜の対立のイメージラリーは、愛と憎悪の背反対立、ドラマティック・アイロニー、さらに、地口や矛盾語法によって表現さ

れる対立概念と重なり合い、相互的に補強し合うものである。

宿敵両家の息子と娘の許されぬ恋というジレンマ矛盾は、明暗のイメージでも表されている。Romeo は Juliet を輝く光のイメージで捉える。これは 38 ページで引いた Romeo の一人言で明らかである。Romeo にとって Juliet が「炬火に輝く術を教える」光であり、「夜のほおにかかって輝く」美であり、「太陽」(II.ii. 2) であり、「星」(15-22) であるならば、Juliet にとって、Romeo は “day in night” (III.ii.17) であり、また「星」(22) である。しかし、輝く美しさが、闇夜や黒色を背景にして一際映えるように、二人の愛を可能にし、成就させるのは夜である。バルコニー・シーンの甘美な陶酔も夜の束の間である——“’Tis almost morning, I would have thee gone.”(II.ii. 176) Juliet の祝婚歌ともいうべき Romeo を待ち焦れる独白は夜に対する祈りである。初夜は文字通り夜である。しかし、朝を伴わない夜はあり得ない。それこそ相手を光のイメージで捉えているのにかかわらず、「明るさが増せば増すほど二人の心は暗くなり悲しくなる」(III.v. 36) のである。夫婦でありながら、朝日は愛別離苦を意味する——“I must be gone and live, or stay and die.” (11) この矛盾、ジレンマは、二人の愛を特徴づけるものである。

Romeo と Juliet の愛を最も的確鮮烈に表しているのは「稲妻」、「火薬の爆発」のイメージであろう。「稲妻」も「爆発」も瞬間的な光と熱のエネルギーであり、その生起は即終焉を意味する。

このイメージは、愛を誓ったばかりのバルコニーの Juliet によってただならぬ予感として語られる。

Well, do not swear. Although I joy in thee,  
I have no joy of this contract tonight:  
It is too rash, too unadvis'd, too sudden,  
Too like the lightning, which doth cease to be  
Ere one can say 'It lightens'. Sweet, good night.

(II.ii. 116-20)

Lawrence も、激しい喜びを「爆発」のイメージで諫め、節度ある末長き幸福を説く。

These violent delights have violent ends  
And in their triumph die, like fire and powder,  
Which as they kiss consume.

(II.vi. 9-11)

「激しい喜びは…火と火薬が触れ合えば炸裂し四散し果てるように、勝利のさ中に死滅する」と修道僧の分別は論ず。“triumph” は「勝利」という意味だけでなく、“raptuous delight,” “splendor” も OED は与えている。“consume” には、“destroy,” “burn away” という定義とともに、“consummate” の意味も含まれる。つまり、“consume” は一語にして、“in their triumph die” のパラドックスを表す。これは、Romeo と Juliet の愛のパラドックスである。触れ合うこと、歓喜、勝利が、即、爆発であり、破滅終焉である。爆発、破滅は、同時に、成

就達成——consummation である。このような情念の燃焼、生の爆発——これが Romeo と Juliet の愛である。この電光一閃の恋は闇夜に輝く。この愛は日常性の「不純」な要素によって汚染浸蝕されることはない。親の意図する良縁、Lawrence の説く末長き幸福も彼らの眼中に無い。下男たちや Mercutio が語る卑猥な男女関係ともむろん次元を異にする。乳母の便宜主義的な結婚観も、二人の愛の絶体性を鮮明にするだけである。だからこそ consummation が不滅の美しさとなるのである。

岩崎宗治氏は、「剣と接吻」と題して、*Romeo and Juliet* における「愛と憎しみの主題、それと結びついた愛と死の主題」を、図像学を援用して論じている。<sup>14</sup> この興味深い論考で引かれているのが、Edgar Wind が指摘した「死としての接吻」の観念である。Wind によれば、「死ぬことは神に愛されることであり、神を通じて永遠の至福にあずかることである」が、このような死は、古代とキリスト教双方が認めかつ賞賛するものであり、象徴的神学者たちによってキスとよばれていたという。<sup>15</sup> 岩崎氏は、このような精神史の伝統、その視覚的表現である図像学の視点に立って、終幕における Romeo の Juliet に対する、そして Juliet の死んだ Romeo に対するキスに、「天上的なものとして永遠化する…愛の変容の力」を見出している。この解釈は、われわれが追ってきた、二要素の対立、アイロニー、パラドックスのパターンと容易に重なるものである。Romeo と Juliet の愛は死に終る。しかしその死は勝利“triumph”であり、キスは文字通り死のキスであると同時に、成就、達成を意味し、永遠化をもたらすキスである。毒薬を仰いで残す Romeo の最後の言葉、“O true apothecary,/ Thy drugs are quick. Thus with a kiss I die.” (V.iii. 119-20) に、liebestod (愛死)、メタフォリカルな性行為だけでなく、“quick”に古い動詞の意味“come to life,” “revive”を読みとることも不可能ではない。Juliet は、42 ページで引用したように、死をもたらす毒薬のことを、はっきりと「回生の妙薬」“restorative”と言い切っている。起死回生の妙薬ならぬ、死即回生のパラドックスである。

二者対立とパラドックスは何気なく言及される植物にも託されている。Romeo の R と同じ文字で始まり、Juliet も Romeo と結びつけている云々と乳母が語る植物——rosemary (マンネンロウ) である。<sup>16</sup> 「海の露」という意味をもち、白い可憐清楚な花を咲かすこの常緑カン木は、“faithfulness,” “remembrance”を花言葉としている。結婚を寿ぐ祝言の木であり、また弔いの木ともなっている。結婚と葬式の対比は明らかであるが、rosemary は、「死としての接吻」同様、死を通して魂を永遠化するパラドックスをも象徴する植物である。Romeo と Juliet は、わずか4、5日の中に燃え尽きる。「恋をむさぼり食う死」は、たしかに二人を餌食にする。この痛ましい死が、二人の愛を“death-devouring love”として万人の心を打つものとし、rosemary の花言葉よろしく、忘れ難きものとする。純粋で激しい愛を不滅にするのは、否定による肯定のパラドックスである。*Romeo and Juliet* は、純粋で激しい愛の持続が許されない人生において、それでもなお人々の心に秘むそのような愛への願望憧憬に響き合う愛の讃歌である。



註

1. Laurence Lerner, *Love and Marriage: Literature and its Social Context* (London: Edward Arnold, 1979), pp. 1, 5-8.
2. Denis de Rougemont, *L'Amour et l'Occident* (1939) 鈴木健郎・川村克己訳『愛について——エロスとアガペー』(岩波書店, 昭和34年), p. 8.
3. Norman Rabkin, *Shakespeare and the Common Understanding* (New York: The Free Press, 1967), p. 181.
4. *Romeo and Juliet*, ed. Brian Gibbons (London: Methuen, 1980), II. v. 7. 以下 *Romeo and Juliet* からの引用はすべてこの Arden 版により本文で示す。
5. Harry Levin, "Form and Formality in *Romeo and Juliet*," *Shakespeare Quarterly*, 11 (1960), 3-19.
6. たとえば, H.B. Charlton, *Shakespearian Tragedy* (1948; rpt. Cambridge: The University Press, 1961), pp. 49-63; George Ian Duthie, "Introduction," *Romeo and Juliet*, ed. John Dover Wilson (1955; rpt. Cambridge: The University Press, 1971), pp. xvii-xxiv. むろん性格悲劇とする見方もある。Franklin M. Dickey, *Not Wisely But Too Well: Shakespeare's Love Tragedies* (San Marino, Calif.: The Huntington Library, 1957), pp. 89-117; Virgil K. Whitaker, *The Mirror up to Nature: The Technique of Shakespeare's Tragedies* (San Marino, Calif.: The Huntington Library, 1965), pp. 109-19.
7. Cf. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, ed. Geoffrey Bullough, I (London: Routledge and Kegan Paul, 1977). 4日か5日か議論があるが、劇場においても、本論においても問題にする程ではない。
8. M.M. Mahood, *Shakespeare's Wordplay* (1957; rpt. London: Methuen, 1979), pp. 65-68.
9. Ibid., p. 56.
10. Lawrence Edward Bowling, "The Thematic Framework of *Romeo and Juliet*," *PMLA*, 64 (1949), 208-20.
11. Joseph S.M.J. Chang, "The Language of Paradox in *Romeo and Juliet*," *Shakespeare Studies*, 3 (1967), 24.
12. Mahood, p. 61.
13. Caroline F.E. Spurgeon, *Shakespeare's Imagery* (1935; rpt. Boston: Beacon Press, 1958), pp. 310-16.
14. 岩崎宗治「剣と接吻 (1)——『ロメオとジュリエット』の舞台と図像——」『英語青年』, 119 (1973), 260.
15. Edgar Wind, *Pagan Mysteries in the Renaissance* (1958; rpt. Harmondsworth: Penguin Books, 1967), pp. 154-55.
16. Warren Smith, "Romeo's Final Dream," *MLR*, 62 (1967), 580.

原稿受理 1981年11月27日

*Romeo and Juliet*: Ironic Beauty in “Consummation”

Seiki Kinjo

The purity and intensity of love attained by Romeo and Juliet seem to suggest that such love is irreconcilable to human reality. The world of *Romeo and Juliet* itself, indeed, is antithetical, and the antithetical structure of the play reflects and reinforces the very antinomy between the all consuming passion of the young lovers and their world which is torn by the feud and filled by accidents. Like fire and powder Romeo and Juliet “consume” as they kiss, dying “in their triumph.”

However, their “love-devouring death” only serves to make their passion “death-devouring love.” The antithetical structure serves to reaffirm the beauty of their love, whose “consummation” simultaneously and ironically involves fulfilment and destruction. This is the ultimate affirmation achieved paradoxically by negation. The purity of their love is thus maintained and its intensity rendered more poignant by its very brevity.